

## 郡是製糸創業者・波多野鶴吉の事績の顕彰についての一考察（Ⅰ）

松 本 和 明

### 要 旨

郡是製糸株式会社は、京都府何鹿郡綾部町（現・綾部市）において、波多野鶴吉を中心に、地域の中核産業である養蚕業および製糸業の振興を目指して、1896年に設立された（現・ゲンゼ株式会社）。波多野は、多種多様な利害関係者との共存共栄を明確に掲げ、高級生糸への特化とアメリカへの輸出を経営戦略の中軸として事業を展開し企業成長を果たすとともに、地域への多面的かつ多様な貢献活動を推進して、地域の持続的成長に大きく貢献した。

波多野の誠実な姿勢と地域振興への強い思いは、地域および業界内外から広く尊敬を集めた。1910年代半ばより、地域および業界関係者から、波多野の功績を称える動きが出始めた。1918年に波多野が死去したのちに顕彰事業として本格的に進められ、幅広く寄付金を集めて、1920年に波多野記念館が完成するに至った。波多野の事績がふりかえられるとともに、各界各層の人びとが集い様々な活動がおこなわれ、地域振興の一大拠点となった。

キーワード：波多野鶴吉、郡是製糸、何鹿郡蚕糸同業組合、四方豊蔵、由良源太郎、波多野記念館

### はしがき

波多野鶴吉（1858年～1918年）は、京都府何鹿郡綾部町（現・綾部市）において、地域の中核産業である養蚕業および製糸業の振興を目指して、組織的活動を広範に展開するとともに、1896年の郡是製糸株式会社の設立および経営を主導した（現・ゲンゼ株式会社）。

波多野は、多種多様な利害関係者との共存共栄を明確に掲げ、高級生糸への特化とアメリカへの輸出を経営戦略の中軸として事業を展開して企業成長を果たすとともに、地域への多面的かつ多様な貢献活動を推進し、地域の持続的成長に大きく貢献した。

波多野の誠実な姿勢と地域振興への強い思いは、地域および業界内外から広く評価と尊敬を集めた。早くも、1896年には緑綬褒章が与えられた。これの「褒章之記」には、「心力ヲ養蚕製糸ノ事業ニ専ラニシ夙ニ共同ヲ当業者ニ説キ大ニ改図ヲ一地方ニ勸メ（中略）其郡ニ施ス所ハ闔府ニ矜式シ府ニ行フ所ハ諸国ニ之観倣スルニ至ル洵ニ実業ニ精励シ衆民ノ模範タル者」<sup>1)</sup>と記述されている。他方では、「郡是製糸株式会社の創立せらるゝや社長に推され製糸の範を示し蚕糸業に関する施設経営至らざるなし（中略）実に京都府蚕糸界の重鎮たり」<sup>2)</sup>と叙述された。

1910年代半ばより、地域および業界関係者から、波多野の功績を称える動きが出始めた。1918年に波多野が死去したのちに顕彰事業として本格的に進められ、幅広く寄付金を集めて、20年に波多

1) 村島渚『波多野鶴吉翁伝』郡是製糸株式会社、1940年、258～259頁。

2) 加藤辰弥編輯『日本農界偉人名鑑 全』多木製肥所、1911年、12頁。

野記念館が完成するに至った。波多野の事績がふりかえられるとともに、各界各層の人びとが集い様々な活動がおこなわれ、地域活性化の大きな拠点となった。

波多野の事績の顕彰については、村島渚により執筆され、1940年に郡是製糸が刊行した波多野の伝記である『波多野鶴吉翁伝』をはじめ、同社がこれまで発刊した、『郡是四十年小史』（1936年）、『郡是製糸六十年史』（1960年）、『グンゼ株式会社八十年史』（1978年）、『グンゼ100年史』（1996年）、および『グンゼ125年史 1896-2021』（2022年）には必ずしも子細に取り上げられていない。他方、綾部市出身のジャーナリストとして名高い四方洋が著した波多野の評伝（『宥座の器—グンゼ創業者波多野鶴吉の生涯—』あやべ市民新聞社、1997年）にひとつとおりの記されているものの<sup>3)</sup>、十分なものとはいえない。

そこで、本稿は、綾部地域の近代史においても重要な史実というべき波多野の事績の顕彰に向けての多角的な活動ないし事業について、主体的に関与した各界の人びとの構想や活動に特に着目し、様々な史・資料を渉猟かつ検討して、たちいって跡付けていきたい。

なお、綾部地域にかかわる史実については、特に断らないかぎり、綾部町史編纂委員会が1958年に発行した『綾部町史』の記述によっている。また、引用する史料には、適宜句読点を付する。

## Ⅰ 波多野鶴吉と何鹿郡蚕糸同業組合

波多野鶴吉は、1886（明治19）年3月に、農商務省達第41号をもって85年に発布された蚕糸業組合準則に基づき、何鹿郡の蚕糸業の振興を目的として創設された、京都府何鹿郡蚕糸業組合の初代組長に29歳で就任した。同組合の規約第1条に「何鹿郡内製造者ト売買人トヲ間ハス同業者ノ盟約ヲ以テ設置ス」と蚕糸業各関係者の連携をもって創設するとしたこと、第4条に郡内町村を14の「小組」（鷹栖村・綾部町・大島村・栗村・報恩寺村・物部村・志賀郷村・有岡村・淵垣村・梅迫村・上杉村・建田村・八津合村・故屋岡村）に分けると規定したことは特に注目に値する。

波多野は、組合の方向性を事業目的として次のように示した（規約第13条）<sup>4)</sup>。養蚕および製糸の効率化や品質の向上、研究・教育の充実など多岐にわたっていたことがわかる。

- 第一項 桑樹ノ改良及培養適否ヲ講究スルコト
- 第二項 製糸ニ良好ナル種類ヲ選ミ育養スルコト
- 第三項 漸次太陽殺ヲ止メ製糸ニ適スル殺虫法ヲ設クルコト
- 第四項 蚕病予防法ヲ講究スルコト
- 第五項 繭ノ貯蔵ヲ完全ナラシムルコト

3) 同書の増補版が2016年に刊行されている。本稿は増補版に依拠している。特に26～30頁を参照されたい。

4) 京都府何鹿郡蚕糸同業組合清算事務所発行『何鹿郡蚕糸業史』1933年、21～22頁。

- 第六項 繭糸ハ精良ヲ主トシ粗製乱造ヲナサザルコト
- 第七項 蚕糸ハ品位束装ヲ一定トシテ成ルベク合同販売スルコト
- 第八項 繭市場及生糸市場ヲ設クルコト
- 第九項 共同揚篋場及共同殺虫場ヲ設クルコト
- 第十項 内外販売ノ路ヲ拡張スルコト

波多野が主導し、綾部町での清涼飼の伝習会の開催(1887年、遠藤三郎兵衛や片山金太郎らが参加)、郡内各地での簡易養蚕伝習所および中等養蚕伝習所の開設、手挽から座繰または器械製糸への転換の奨励、共同揚柶所(89年に中上林村、90年に綾部町)や共同結束所の開設、各地への技手を配置しての技術指導、検査役(由良源太郎ら)による粗製乱造の防止と品質の統一化の推進、共同販売のあっせん、最新の技術習得のため高倉平兵衛および新庄倉之助(ともに綾部町)の先進地の群馬県下への派遣などを多角的に展開した。

1898(明治31)年5月には、前年の重要輸出品同業組合法の制定にともない京都府何鹿郡蚕糸同業組合に改組し、引き続き波多野が組長、副組長に片山、評議員に遠藤と高倉および山室亀太郎(東八田村)が就いた。京都府および郡内各地と緊密に連携し、桑園や繭の品評会の開催、蚕業図書館の開設、蚕業集談会の開催、何鹿郡蚕業会の結成や『何鹿実業月報』の発刊、共同蚕種生産の普及、蚕の病毒絶滅の施設設置、冷蔵改善の蚕種貯蔵庫の建設、地区毎の養蚕組合の支援、繭の正量取引の導入など、活動はより多彩となった。

波多野の業績に対しては、後に、「波多野組長ノ絶倫ナル、奮闘努力ト其ノ博識達見ニ基ク指導ト崇高ナル人格ノ感化ニヨリ、又純真ナル組員ノ一致協力ニヨリマシテ組合ノ業務ハ着々伸展シ、斯業改善ノ効果顕ハレ次第蚕糸業ノ発達普及ヲ見ルニ至」<sup>5)</sup>と振り返られている。

この間、波多野は、1888(明治21)年に京都府蚕糸業取締所(86年創設)の副頭取に就き、その後改組された京都府蚕糸業組合頭取(91年)、さらに京都府蚕糸同業組合連合会長(98年)として府全域の蚕糸業振興をも担った。

ことに、波多野は教育機関の開設を強く志向し、京都府(知事・北垣国道)からの補助金も受けて、1893(明治26)年に組合立で高等養蚕伝習所を綾部町にて開学を果たした。所長には波多野自らが就き、教頭には縁あって内村鑑三の紹介により、札幌農学校出身の福原鉄之助を招いた。98年に製糸部を新設し、99年に城丹蚕業講習所と改称して、施設や教育内容の拡充が進んだ<sup>6)</sup>。なお、1918(大正7)年に京都府へ移管され、24年に城丹蚕業学校となった。

教育ないし人材育成関連では、1906(明治39)年の組合創設20周年を記念して、何鹿郡内の有為な若者に大学在学中の学資を給与する事業を創始したのは特筆すべきである。その規程の第1条に

5) 前掲『何鹿郡蚕糸業史』459頁。

6) 前掲『波多野鶴吉翁伝』102～114頁。

は「農学及法学ヲ専攻セントスル学生各一名ヅ、ヲ選抜シ在学中学資ヲ補助シ卒業後本郡蚕業ノ顧問ニ任ズルモノトス」<sup>7)</sup>と定められている。

よく知られているように、波多野は1896(明治29)年5月の郡是製糸の設立を主導し、初代社長は長兄の羽室嘉右衛門であったものの、取締役として、1901年10月からは第2代社長として経営全体を統括した<sup>8)</sup>。同社の事業拡大により波多野は多忙を極め、組合の運営に携わることを限らざるをえなくなった。そのため、波多野は、1910(明治43)年3月の任期満了で組長を後進に譲る意向を示した。これに対して、組合員は大いに困却し、総員一致して留任を求めた。やむを得ず、波多野は、組合運営は前年の09年に副組長(第3代)に就いていた四方豊蔵(綾部町)に一任すること、および11年度より組長としての報酬を一切辞退することを条件に、続投を承諾した。これにあわせて、組合は、組長報酬に相当する金額を、将来波多野に報いるために積み立てていくことを決めている。

1910年代においては、蚕品種改良に向けて一代交雑種の導入と普及、原蚕種の共同購入および生産と配布、桑園の改良、蚕業諸統計の充実、さらに、国立の原蚕種製造所設置への協力(11年)<sup>9)</sup>や東京大正博覧会への出品と名誉大賞牌の授与(14年)などが注目される。

## II 何鹿郡蚕糸同業組合を中心とする波多野記念館の建設

1916(大正5)年2月に、波多野は、「郡是製糸会社の発展に伴ひ責任益々重大を加へ、一層全力を会社の経営に傾注する必要あり」<sup>10)</sup>と同年3月の任期満了をもって組長を退任することを正式に表明した。同年5月に、四方が第2代組長に昇格するに至った。

四方豊蔵は、1876(明治9)年に利平の長男として生まれた。利平の代から農業を営んでいた。何鹿郡高等小学校、福知山の成美塾を経て、94年に先述した高等養蚕伝習所で養蚕を修めた。奥上林村や綾部町で巡回教師を務めたのち、1900年に何鹿郡蚕糸同業組合に入り、書記、秋蚕試験部主任、綾部小組長および綾部町農会長、蚕業講習所長などを担い、実務経験を蓄積した。他方、何鹿郡会議員・議長、綾部町助役(1906～09年)、綾部町長(第10・11代:1924～32年)、京都府会議員(1923～27年:政友会系)、綾部信用組合初代組合長(1927年設立)、綾部製糸・つばめや商店・郡是製糸相談役、北日本殖産取締役、何鹿銀行・両丹銀行監査役を歴任するなど、地方行政および政界並びに産業界で幅広く活躍した<sup>11)</sup>。

1916年は、組合創設および波多野の組長就任から30周年を迎える年であった。組合は、波多野の

7) 前掲『何鹿郡蚕業史』109頁。

8) 『何鹿郡蚕業史』には、郡是製糸に関して、「同社ノ発展ト共存同栄ノ精神ニ磐據セル経営ハ益本郡蚕糸業ノ隆昌ニ顕著ナル効果ヲ収ムルニ至リマシタ」(459頁)と特記されている。

9) 原蚕種製造所は、その後1914年に蚕業試験場綾部支場、24年に農林省蚕業試験場綾部飼育所と改称された。

10) 前掲『何鹿郡蚕業史』221頁。

11) 京都府議会議務局編『京都府議会歴代議員録』京都府議会、1961年、953～954頁。

功績を報いるべく具体策を検討したものの、前述の特別積立金は 1,100 円にとどまるなどにより、成案は容易に得られなかった。他方で、波多野から「記念品なればとて、之れを私するを好まず、社会公共の福利に資する途を講ずべし」<sup>12)</sup> と内意を受けていた<sup>13)</sup>。

そこで、四方豊蔵は、「地方後進の訓化となり兼て公共の福利となる記念館の建設」<sup>14)</sup> との構想を綾部町長を務めていた由良源太郎や郡是製糸常務取締役の遠藤三郎兵衛、何鹿郡長（第 7 代）の藤正路らに示し、賛同を得た。

由良源太郎は、中筋村の由良新左衛門の次男として生まれ、1890 年に分家し綾部町（本宮町）で生糸卸商を起業した。事業は軌道に乗り、新興商人としての名声と信用が高まった。1901 年に綾部町会議員に初当選し、学務委員や所得税調査委員、何鹿郡会議員や綾部町助役（1910 年 1 月～11 年 6 月）などを歴任した。

由良は、1911 年 12 月には綾部町長（第 6 代）に就任した。1920 年 5 月まで 3 期にわたり務め、区有林の統一、負債の償却、河川井堰の改築や砂防工事、植林、下水道の新設、小学校校舎の改築、綾部駅周辺の道路改修、町役場の新築などを進めた。町長としての業績は、「次から次と画策して誤らず、其事績は赫々として枚挙に遑あらず、郡内町村長中の敏腕家にして町の功労者たり」<sup>15)</sup> と当時から高く評価されていた。

町長退任後に郡是製糸の常務取締役に就き（1908 年に監査役、11 年に取締役に選任）、営業部長（20 年）や調査部長（21 年）も兼ね、後述する 1918 年の波多野の死去後に社長となった遠藤および専務取締役となった片山を支えた。

1923 年 9 月 1 日の関東大震災を契機に、神戸港からの生糸の輸出再開の機運が高まったが、郡是製糸は震災直後に神戸出張所を開設してこれに備えた。27 年 7 月から再開されると本社の販売課を神戸に移転し、由良が駐在・専管して、三井物産や日本綿花および旭シルクなどの商社との直接取引を拡大させた。1928 年 6 月 1 日に在任のまま死去した。

なお、源太郎の長男が金一である。1896 年に生まれ、1918 年に岡山医学専門学校（現・岡山大学）を卒業し、25 年に帰郷して産婦人科医院を開業した。この他、郡是製糸監査役・取締役・相談役、日東精工社長・会長、何鹿銀行頭取、両丹・丹和銀行取締役、京都銀行取締役・相談役、綾部町長（第 9 代）、綾部商工会議所会頭（第 4 代）、綾部ロータリークラブ会長（第 2・8 代）、綾部医師会会長、綾部体育協会会長なども歴任している。

1916（大正 5）年 6 月 25 日に、何鹿郡蚕糸業同業組合は評議員会を開催し、先述の藤や遠藤、由

12) 前掲『何鹿郡蚕業史』226 頁。

13) 四方豊蔵らは波多野に銅像の建立を申し出たものの、波多野はこれを固辞した（村上佑二『綾部町史』綾部町史編纂委員会、1958 年、219 頁）。

14) 注 12 と同じ。

15) 藤本薫編纂・発行『三丹の家と人』1931 年、191 頁、綾部市図書館所蔵。



良源太郎、および大島好太郎（元評議員）<sup>16)</sup> にも参加して討議した結果、波多野を頌徳する公会堂として「波多野記念館」を建設すること、その予算はおおよそ 25,000 円と見積もり、資金調達は郡是製糸が 13,000 円、同組合が 2,000 円をはじめ、何鹿郡下各町村、郡内関係者・出身者、京都府蚕糸同業組合連合会および各郡の蚕糸同業組合などから寄付を受けるとともに何鹿郡が敷地購入費 2,500 円を支出することを決定した。

16 年 11 月には、次のような「波多野翁頌徳記念館建設趣意書」が公表された<sup>17)</sup>。

凡そ文化は経済発達之の淵藪をなし、経済発達之の地は以て文化の中樞をなす、近時農村問題の喧伝せらるゝ蓋し農村生産経済の微々として挙げず、社会の進歩に伴ふ農村生活の向上に欠如するものあるに因由するなくんばあらず。惟ふに蚕糸業は農家唯一の副業にして、其の利益鮮少ならず、応に国家的主要生産品の首班たり府下蚕糸業の逐年隆興して、以て地方農村の頽陽を支へ、更に進んで軌近堅実なる基礎を致し、能く社会の進運に同じ文明の恵沢に浴しつつあるもの一に斯業の発達に負へり。倩々繹めるに、府下蚕糸業の今日ある一朝一夕の業績に非ず、安んず亦偶然の成果ならんや。根幹遠く且つ深きをなすもの存在して存す。

然り則ち、我波多野鶴吉翁は夙に蚕糸業の嘱望すべきを看取し、専ら斯業の改善発達に専念し、明治十九年郡蚕糸業組合并京都府蚕糸業取締所の組織に尽瘁し、廿一年京都府蚕糸業取締所副頭取に選まれ、更らに廿四年頭取に挙げられ、惟謀弘く経綸細かに大に協同の美風を涵養し、廿六年蚕業講習所を創設し、良師を聘して學術を習練せしめ、自ら惇徳を以て人才を陶冶し、地方中堅者の養成を行ひ、廿九年郡是製糸会社を起して生産消費の円滑を企画すると共に、範を製糸業に示めし、取引上の弊風を矯正して信用正量取引を取行する等、劃策経営挙措悉く斯業の開発に至適し、自彊不自の惕励を関する星霜爰に三十有余正に一日の如し。方今府下の蚕糸業は其組織を於て全国之を矜式し、其生産物の品位を於て各地此雄範に順ふ、咸な之れ翁が宿昔の志を就せる功績の賜に外ならず、寔に偉なりと謂ふべし、宜べなり往年事長くも叡聞に達し、翁が善行を表旌せられ、近く大正曠古の御大札行はるゝに際し聖旨重ねて叙位の恩命あり、翁の光榮正に余蘊なし、而も翁の身を持する益々恭謙徳を積む、弥々鞠躬其崇高なる人格に対し、

16) 大島好太郎は、1875 年に佐賀村で生まれ、綾部高等小学校と同志社普通学校尋常中学科で学んだ。蚕糸技術者を志し、京都府立第二区養蚕伝習所や高等蚕業伝習所さらに蚕業講習所（現在の東京農工大学のルーツ）で専門知識を修得した。蚕種検査員として当業界に入り、技術の振興や教育に携わった。城丹蚕業講習所長（第 4 代）や京都府農林技師、京都府原蚕種製造所長、京都府蚕糸同業組合連合会技師兼主事、などを歴任した（井川市太郎編纂『丹波及丹波人』丹波青年社、1931 年、757 頁、綾部市図書館所蔵）。何鹿郡蚕糸同業組合では嘱託技師などを務め、1922 年 4 月に第 3 代組長となった。これまでの組長の波多野および四方豊蔵は地域の名望家であったが、大島はいわばテクノクラートであり、画期的な人事だったといえる。大島は「内能ク職員ヲ愛撫シ業務ヲ振起シ、外組合員ノ和衷協同ヲ厚クシ、恪勤精励斯業ノ開発奨励ニ盡シテ倦マズ」（前掲『何鹿郡蚕業史』229 頁）組長業務に旺盛に取り組み、特に生繭鑑定の統一化、繭取引の公正化、桑園の改良、城丹蚕業学校の改組支援に力を注いだ。24 年 11 月に在任のまま死去した。

17) 京都府何鹿郡役所発行『何鹿郡役所の蹟』1926 年、842～843 頁、綾部市図書館所蔵。

吾人胆仰措く所を知らず、則ち一は頌徳謝恩の意を表し、一は則ち不易の偉業を記念し、以て貽徳を子孫に及ぼし感化訓育の表象たらしむる為、茲に同志相謀つて翁が成業の地綾部町を卜し、頌徳記念館を建設せんとし、聊か趣意のある処を編し、同志諸君に頒つ、冀くば諸君吾人衷心の発露を諒し幸ひに協賛あらんことを。

発起人は、前記の藤、遠藤、大島、由良以外では以下のとおりであった。

大槻条蔵  
木船衛門  
有本辰蔵  
志賀覚兵衛  
岡本耕一  
楠田佐兵衛  
千原延之助  
石田真一  
小北菊二  
小島信三郎  
室井成蹊  
宅間藤馬  
奥田新

大槻条蔵（1867年～1931年）は天田郡西中筋村、木船衛門（1849年～1923年）は加佐郡倉梯村の出身で、各村長や京都府会議員を務めるとともに、各地の蚕糸業の振興に携わった<sup>18)</sup>。

千原延之助（物部村）は何鹿郡蚕糸同業組合の副組長・評議員・小組長や何鹿郡信用組合長、志賀覚兵衛（志賀郷村）は何鹿郡蚕糸同業組合評議員および何鹿銀行常務取締役・頭取を務めている<sup>19)</sup>。

宅間藤馬は1875年に船井郡富本村で生まれ、私立京都法政大学（現在の立命館大学のルーツ）専門学部法律科を卒業し、1911年に郡是製糸に園部分工場主任（工場長に相当）として入社した。1916年に船井郡蚕糸同業組合長となったため一旦郡是製糸を退職し、17年には富本村長に就いた。村長退任後の18年に郡是製糸の監査役に選任され、25年には同社初の常任監査役となった。34年に常務取締役に転じ、39年まで務め、遠藤や波多野林一（38年に第4代社長に就任）を支えた。朝

18) 前掲『京都府議会歴代議員録』900～901, 965～966頁。

19) 前掲『何鹿郡蚕業史』231～236頁。

鮮産業（朝鮮半島・忠清南道の大田工場に繭を供給するために26年に設立）取締役や京都府蚕糸同業組合連合会代議員も務めた<sup>20)</sup>。

時期は前後するが、千原、宅間、および由良源太郎と四方豊蔵が郡是製糸の相談役に推選されている。郡是製糸の原始定款の第27条のなかで相談役を15名とすること、第30条で「相談役ハ取締役会ノ選定ニ依リ之ヲ囑託シ当会社事業ニ関シ諮問ニ応答スル者トスル」と規定された。当初の任期は6年であったが、1899年には3年に変更となった。あわせて、人数を若干名とし、取締役会の決議をもって株主中から選任および招集することとした（定款第20・29・30条）<sup>21)</sup>。同社が特に地域のステークホルダーとの多面的かつ持続的な関係を重視していたことが見てとれる。

記念館の建設事業が開始され、寄付金は早々に26,385円余集まったものの、第1次世界大戦下の資材・物資価格の大幅な高騰により、これでは大幅に不足となる事態となった。

四方豊蔵らは検討を重ね、主な関係先に寄付金の増額を要請することとした。これを快諾して、郡是製糸が10,000円、綾部町が3,000円、綾部製糸が1,200円をさらに投じた。加えて、何鹿郡が補正予算においてさらに15,000円を町村分賦額として計上・支出することを決めた。関係者のさらなる篤志により大きな困難を克服できたのである。

ところで、綾部製糸は、福井大蔵らを中心として、1913（大正2）年3月に、資本金2万円で設立された。綾部町字北大坪33番地に工場を開設した（後に本工場）。経営戦略・事業展開は郡是製糸のそれと近似していたが、絹織物の製造が独自であった。業績は好調だったとみられ、16年に10万円、翌17年には60万円に増資している。

1920年に一気に400万円に増資するとともに城南製糸（資本金50万円・相良郡木津町に工場）を合併した。さらに、同年に三重県宇治山田市の度会製糸、22年には与謝郡の筒川村生産販売信用組合が運営していた丹後繭糸製糸場を買収し、合計4工場を有した<sup>22)</sup>。

1922年3月末時点では、社長が福井、取締役が木村庫之助・高橋源七・山口五兵衛・高倉平兵衛・飯田俊之助、監査役が四方幸太郎・高野定吉・久馬藤吉で、総株数90,000株のうち福井が6,822株、木村が3,175株、山口が2,096株を保有していた<sup>23)</sup>。

1924年時点での綾部製糸の資本金は450万円（払込済120万円）に対して郡是製糸の資本金は2,000万円（払込済879万8,323円）と大きな開きがあり、波多野と関係が深い高倉が郡是製糸の監査役（1902～03、08～09年）、取締役（11～17年）および相談役を歴任していることから、両社間にはライバル関係とはみられない。一方で、綾部製糸の本工場の生産規模は600釜・25,155貫・3,036円5銭9

20) 杉山元次『三丹人物誌』文郷社、1935年、29頁。

21) 社史編纂委員会編『郡是製糸六十年史』郡是製糸株式会社、1960年、668、687頁。

22) 京都府教育会何鹿郡部会編纂・刊行『何鹿郡誌』1926年、419～422頁。

23) 安藤仁隆編纂『銀行会社要録』第27版、東京興信所、1923年、京都府16頁。福井は何鹿銀行監査役や東亜蚕糸取締役、木村は横浜興信銀行・七十四銀行取締役、高倉は何鹿銀行常務取締役を務めていた。



厘で、郡是製糸の本工場（青野）の540釜・27,968貫・3,596円16銭であり<sup>24)</sup>、両工場の業容がほぼ肩を並べていたことに注目しておきたい<sup>25)</sup>。

1918（大正7）年2月23日、波多野は、何鹿郡立綾部女子実業学校（現・京都府立綾部高等学校）でおこなわれた何鹿郡在郷軍人会が主催した講演会で、「日本魂と宗教」と題した講演中に脳溢血で倒れ、同日21時50分、60年の生涯を閉じた。同会には綾部町長を務めていた由良源太郎をはじめ記念館の建設計画の関係者が多く参加していた。波多野の急逝がどれほどのショックを与え、悲しみをもたらしたかは想像に難くない。こうしたなかでも、彼らは計画を前に進めていった。

特筆すべき史実を取り上げる。波多野の葬儀等が終結したのちの18年5月に、波多野家（当主は嫡男の林一：同年4月に郡是製糸常務取締役役に就任）から何鹿郡蚕糸同業組合に300円の寄付がなされた。組合では使途を検討した結果、新たな発明や新技術の開発を促すべく、「発明考案奨励規程」および「発明考案奨励基金積立並管理規定」を制定した<sup>26)</sup>。前者の第1条は、目的として、「本組合ハ蚕糸業ノ技術並経営上ノ改善発達ヲ計リ組合員ノ利益ヲ増進セシムル為メ各種ノ発明考案ヲ奨励保護スルモノトス」と掲げた。また、発明考案者の表彰並びに賞金授与に加えて参考品を収集・陳列および講演会を開催すること（第2条）、賞金は500円以下とすること（第5条）なども定められている。波多野のいわば最後の地域貢献が、長きにわたり重視し多角的に推進してきた人材育成・能力開発への支援だったのである。

建設用地の選定や買収、建物の移設に予想以上に時間を要し、約3年が費やされた。ようやく1920年2月に本体を着工できた。

24) 前掲『何鹿郡誌』414、422頁。

25) 綾部製糸の業績は、1920年代半ば以降、景気の悪化が進むなかで、著しく不芳となった。これに対して、1927年に大口債権者である百三十七銀行（1879年に兵庫県多紀郡篠山町で第百三十七国立銀行として設立、1906年に綾部支店を開設）と何鹿銀行（1897年創設の南但銀行を起源、1913年に志賀銀行に改称、19年に志賀郷村から綾部町に移転さらに名称変更、両行については、株式会社京都銀行業務部編集・発行『京都銀行二十年史』1962年、36～37、59～60頁による）並びに生糸卸商の神栄生糸（1887年に伊藤長次郎により神戸で創業、現・神栄）が再建策を協議および展開した。しかし、28年3月に、綾部製糸の社長を務めていた吉村伊助（京都府中郡峰山町浪花：中郡蚕糸同業組合長・京都府会議員・衆議院議員などを歴任）が急逝し、再建が暗礁に乗り上げた。3社が改めて検討した結果、各社の担保を共同化し、神栄が中心となって新会社を立ち上げ、綾部製糸の事業を継承することとなった。28年5月に新綾部製糸を資本金10万円で設立し、代表取締役専務に笹岡敏男、綾部工場長に辻本敏三、花ノ木地内に設置した蚕事課の課長には永井光蔵が就いた。笹岡は1888年に新潟県南蒲原郡長沢村（現・三条市）で生まれ、1914年に東京帝国大学を卒業後、帝国製糖や久原鉱業で勤務した。辻本は1893年に和歌山市で生まれ、1918年に東京高等蚕糸学校を卒業後に綾部製糸に入社した。永井は1886年に何鹿郡小畑村で由良勘兵衛の三男として生まれ（1910年に中筋村の永井市之助家に入婿）、1903年に城丹蚕業講習所を卒業後に養蚕教師・技術者となり、16年に綾部製糸に入社した（前掲『三丹の家と人』145～147頁）。会社新設直後から高品質の蚕種製造を重視し、1929年に那覇市牧志町に沖縄製造場を開設している。1931年には蚕種製造高が全国3位となった。1930年に業績が悪化していた豊中生糸（大分県中津市）・木曽川製糸（愛知県葉栗郡木曽川町）・田中製糸（長野県小県郡県村）を傘下におさめた。さらに、31年には山家村鷹栖の山家製糸（1919年設立）を買収した（神栄100年史編纂委員会編『神栄百年史』神栄株式会社、1990年、102～116頁）。1940年に神栄製糸と改称し、42年に神栄生糸に買収された。綾部での製糸は1978年まで続けられた。綾部製糸の事業展開と神栄による経営再建については別稿にあらためたい。

26) 前掲『何鹿郡蚕業史』224～225頁。

この間、1919（大正8）年には、四ツ尾山麓の南ヶ丘に「波多野記念碑」が建立されている<sup>27)</sup>。

1920（大正9）年11月16日に、4年間をかけて、波多野記念館が本宮町（後に並松町）に完成した。敷地面積749.78坪、建物面積203坪（本館2階建て171坪・付属平屋建て8坪ほか）であった<sup>28)</sup>。ちなみに、隣地には波多野が創設と運営に長きにわたり尽瘁した城丹農事講習所および何鹿郡蚕糸同業組合・京都府蚕糸同業組合連合会があった。

この11月16日は、1917年に大正天皇の皇后である貞明皇后が郡是製糸および蚕業試験場綾部支場を視察しており、郡是製糸本社および本工場で先導した波多野にとって人生最良の日となったといえ、関係者がこれを考慮してこの日を選んだものと推察される。

成工式では、由良源太郎が建設委員総代として工事および収支報告をおこなった。収入金合計は寄付金と何鹿郡費負担、および預金利子（4,808円37銭）を含めて6万2,893円49銭となり、支出の内訳は次のとおりであった。

3,383円12銭 敷地購入費  
4,474円21銭 建物移転費  
3,054円60銭 敷地埋立地均費  
48,815円22銭 建物建設費  
3,166円34銭 監督その他諸雑費

合計

62,893円49銭

何鹿郡長（第9代：1919年6月就任）の高木謙二郎が式辞を述べ、「願くは、本館の建設に依り、偉大なる故翁の遺鉢を偲び、益文化の普及、民力の発展、自治の振興に貢献し、以て建設の趣旨に添はれん」<sup>29)</sup>と積極的な利活用による地域の活性化を切望した。

四方洋氏は、何鹿郡蚕糸同業組合の機関紙である『何鹿実業月報』が記念館の完工について「宏壮たる記念館の規模もお九牛の一毛に及ばざる、偉大なる翁の事業を目の当たりに偲ぶを得、感奮興起する嗚呼何ぞ偉ならずや」と歓喜を抑えられない筆致で伝えたと言及している<sup>30)</sup>。

建設工事・物資調達の請負先は、大工が横山安蔵（請負額：3,650円）、土工が春名条之助（750円）、石材が倉本幸吉（1,050円）、鉄物が岩崎庄七（1,925円）、木材（杉・栗・檜）が岸本岩蔵（11,592円22銭）、木材（松板敷）が四方繁吉（19,500円）、建具が出野嘉一郎（中筋村・1,900円）らであった<sup>31)</sup>。

27) 前掲『綾部町史』336頁。

28) 四方洋は、記念館には2階席がある700～800人を収容できるホールがあったと記しているが（前掲『増補版 宥座の器』26頁）、創設時から設けられていたか、その後改造ないし増築されたかどうかは、残念ながら不明である。

29) 前掲『何鹿郡役所の蹟』844頁。

30) 前掲『増補版 宥座の器』28～29頁。

31) 前掲『何鹿郡役所の蹟』849～850頁。

寄付金額は、総合計が 40,585 円 12 銭に達した。このうち、郡是製糸が 23,000 円（56.7%）、綾部町が 5,100 円、京都府蚕糸同業組合連合会が 3,000 円、綾部製糸が 2,200 円、何鹿郡蚕糸同業組合が 2,000 円、近隣郡（山城および南桑田・北桑田・船井・天田・加佐・与謝・中・竹野・熊野）の蚕糸同業組合合計が 1,045 円 70 銭、何鹿郡内 13 村合計が 3,983 円 42 銭であった。また、個人で内外各地から 35 人が合計 256 円を投じた<sup>32)</sup>。

他方で、何鹿郡が 17,500 円を負担している<sup>33)</sup>。

### Ⅲ 波多野記念館での諸活動の動向

波多野記念館では、地域内外の各界各層の人びとが集い、教育・学術や文化をはじめとして多種かつ多彩な活動が繰り広げられた。講演会や学習・勉強会、諸式典や報告会、イベントやコンサート、政治家による選挙時などでの演説会と枚挙にいとまがない。

波多野記念館で活動をおこなった主な団体として、二土会について取り上げておきたい。高木謙二郎が中心となって、「会員相互の親睦と智徳修養研鑽に努め、世の文化に資する」<sup>34)</sup> ことを目的に 1921 年に結成され、男女 82 名が参画した。教育、宗教、社会、産業、法政、体育、衛生の 7 部が設けられ、各種の研究・調査をおこない、毎月第 2 土曜日に定例会合がもたれた（同会の名称はこれによる）。

二土会は、1922 年に「擬国会」を開催し、百数十名が参加した。四方豊蔵や高倉平兵衛、元京都府会議員の村上国吉（綾部町小呂：24 年に衆議院議員選挙で当選・以来 6 選・農林政務次官などを歴任<sup>35)</sup>）、城丹農事講習所長の河野太郎、医師の吉川五六、陸軍少佐の福井保らが議員あるいは大臣役を担って議論を戦わせた。政治的啓蒙として有意義であった。

1923 年 1 月（22 年 12 月との記述もある）、二土会は、綾部出身の政治学者で同志社大学講師を務める塩見清による地域での社会教育の普及と向上の構想に賛同し、これを支援して、「丹波公民大学」が立ち上げられることとなった。学長となった塩見は、その趣旨を「現代教育は教育機関の都市集中貴族主義的教育国家主義的教育の弊を陥れり、之を救済するには国内的には教育の郷土化と教育の民衆化とを實行し国際的には国際主義的教育即ち人類愛の教育を施すにあり」<sup>36)</sup> と提起している。

教育内容は、第 1～3 種講座および課外講座（英語）から構成され、第 1 講座は政治学や自治行政、蚕糸経済学などの政治・経済、第 2 講座は憲法や行政法、民法などの法律、

第 3 講座は哲学概論や文学概論、心理学などのいわゆる一般教養領域が配置された。

32) 前掲『何鹿郡役所の蹟』845～848 頁。

33) 同上書、843 頁。

34) 同上書、321 頁。

35) 村上の足跡については、前掲『京都府議会歴代議員録』950～953 頁を参照。村上は郡是製糸相談役も務めている。

36) 前掲『何鹿郡役所の蹟』323 頁。

講義は、波多野記念館にて、毎月第1・3土曜日（14時～18時30分）および日曜日（9時～14時）に開講された。塩見をはじめ、京都帝国大学教授の宮本英雄（民法）や河田嗣郎（農業経済学）、小西重直（教育学）、および同志社大学講師の波多野鼎（社会思想論）らが教壇に立った。丹波公民大学の特徴について、以下のように言及・強調された<sup>37)</sup>。

- 1 専任教授を置く必要なきを以て、比較的少額にて経営し得ること。
- 2 各大学より優良なる学者を聘し、講師を依頼する便宜あるを以て、理想的なる総合大学の実を挙げ得ること。
- 3 従来夏季学校講習会と趣を異にし、学問を系統的に講義をなし一ヶ月一講義主義にて連続的研究をなし得ること。
- 4 複雑なる入学規程なきを以て、男女老幼を問はず入学し得ること。
- 5 家庭の事情等にて都市に修学し得ざる人々に、大学教育を簡便に受くる機会を与へること。
- 6 農閑期を利用し得ること。
- 7 各大学に於ては教授と学生との親交を計ること困難なるに、本大学に於ては比較的容易に親交を計り得ること、又会員各自の間に新しき友を見出し得る機会の多きこと。
- 8 地方人士の不堅実なる都市集中熱を醒し、健全なる生活の友となり、郷土文化の向上発展に資する事。

参加会員数は、正会員300名、後援会員126名など、合計559名を数えた。各講座とも好評を博した。

丹波公民大学は、年をおって内容が充実したものの、それにより経費が膨らんで収支が不均衡となり、存続が危ぶまれる事態に陥った。そこで、地域の教育関係者からなる京都府教育会何鹿郡部会（1900年創設）が継承することを決めた。1925年7月から名称を「公民講座」と改め、科目を法政、思想、社会、郷土、衛生、文化、宗教、芸術、経済、職業、趣味娯楽の11科に再編成し、教育会の会員が主な受講者となっていった。

丹波公民大学・公民講座は、今日的にみても先駆的ないし画期的な取り組みと評価できる。教育や人材育成を重視した波多野のスタンスが活かされたといえる。近時、社会教育や生涯学習、さらには特に社会人の学びなおし（リスキリング）が耳目を集めているが、丹波公民大学・公民講座の構想および展開は改めてふりかえられるべきであると思料する。

波多野記念館は、地域振興に向けての諸活動の一大拠点となるとともに、波多野の事績がふりかえられる貴重な場となっていったのである。

この間、1923年3月31日をもって郡制および郡役所が廃止されたのを受けて、波多野記念館の運

37) 前掲『何鹿郡役所の蹟』、324頁。

営は綾部町が担うこととなった<sup>38)</sup>。

### 付論 「波多野先生遺徳碑」の建立

1931（昭和6）年3月に、折からの不況により業容が著しく悪化していた蚕糸業界の立て直しのため、蚕糸業組合法が公布された。これに伴い従来の中央および地方ないし地域ごとの関係諸団体は32年3月31日をもって解散し、製糸業者と蚕種業者は道府県単位、養蚕業者は郡単位で再組織化することとなった。何鹿郡蚕糸同業組合は32年3月13日に臨時組合会を開催し、解散を決議した。同月21日に農林省に解散認可を申請し、翌4月28日に認められた。3月30日には解散式を波多野記念館で開催し、約150名が参加した。

何鹿郡蚕糸同業組合の清算業務は、第4代組長（1925年就任）の小雲嘉一郎（中筋村岡）を中心に、副組長の四方三五郎（口上林村建田）らがフォローしながら進められていった。このなかで、残余財産から波多野の事績を改めて顕彰する碑を建立しようとする意見が出た。検討の結果、賛成で一致したため、小雲が具体的な段取りを慎重に策定した。撰文を郡是製糸誠修学院の内田又一郎、題額を第23代内閣総理大臣を務めた清浦奎吾、揮毫を京都市博物館の小川純（鶴齋）、彫刻を吉村茂左衛に依頼した。清浦は大日本蚕糸会会長（第2代・1902年就任）<sup>39)</sup>、農商務大臣（1903年）、蚕糸業同業組合中央会長（1916年）を歴任し、波多野とも近しかった。清浦は「頌徳碑」と認めている。そして、「波多野先生遺徳碑」として、波多野記念館前に建碑されるに至った。周知のとおり、現在は、綾部市青野のグンゼスクエア（グンゼ株式会社綾部本社向かい）に移設されている。

（未完）

#### 〔謝辞〕

本稿で用いた文献・資料の多くが、綾部市図書館の所蔵である。前館長の生駒彩子氏をはじめ、現任・前任の職員の皆様には、長きにわたり御支援をいただいている。深甚なる感謝を申し上げる。

38) 綾部市に残存するある史料によると、当初は（何鹿）郡公会堂として整備が進められたものの、波多野の遺徳に共感した寄附金が郡内外から多く集まったため、名称が適格的でないとして、1920年1月7日に開催された通常郡会において波多野記念館への変更を議決したとされる（『あやべ市政だより』No.109, 1963年7月, 4頁, 綾部市図書館所蔵）。管見の限り、他の史料や文献にはこうした記述は認められず、現時点ではその正否の判断は留保する。

39) 波多野に対して、1924年4月23日に、大日本蚕糸会（総裁・閑院宮載仁親王）から「恩賜賞」が追賜されている。



## A Study on Commemoration of the Achievements of Tsurukichi Hatano I

Kazuaki MATSUMOTO

### ABSTRACT

Gunze Silk Manufacturing Co., Ltd. was established in 1896 in Ayabe-machi, Ikaruga District, Kyoto Prefecture (now Ayabe City) by Tsurukichi Hatano with the aim of promoting the sericulture and silk-reeling industries, which were the core industries of the region (now Gunze Co., Ltd.). Hatano clearly advocated coexistence and co-prosperity with a wide variety of stakeholders and specialized in high-quality raw silk and exports to the United States as the core of his management strategy and achieved corporate growth by promoting multifaceted and diverse contribution activities to the region, making a significant contribution to the sustainable growth of the region.

Hatano's sincere attitude and strong desire to promote the region earned him widespread respect both within and outside the region and the industry. From the mid-1910s, a movement to honor Hatano's achievements began to emerge from the region and industry. After Hatano's death in 1918, the project to commemorate him was fully underway, and donations were collected from a wide range of sources, leading to the completion of the Hatano Memorial Hall in 1920. Hatano's achievements were looked back on, and people from all walks of life gathered there to carry out a variety of activities, making it a major base for regional development.

Keywords: Gunze Silk Manufacturing Co., Ltd., Tsurukichi Hatano, Trade Association, Toyozo Shikata, Genntaro Yura, Hatano Memorial Hall